

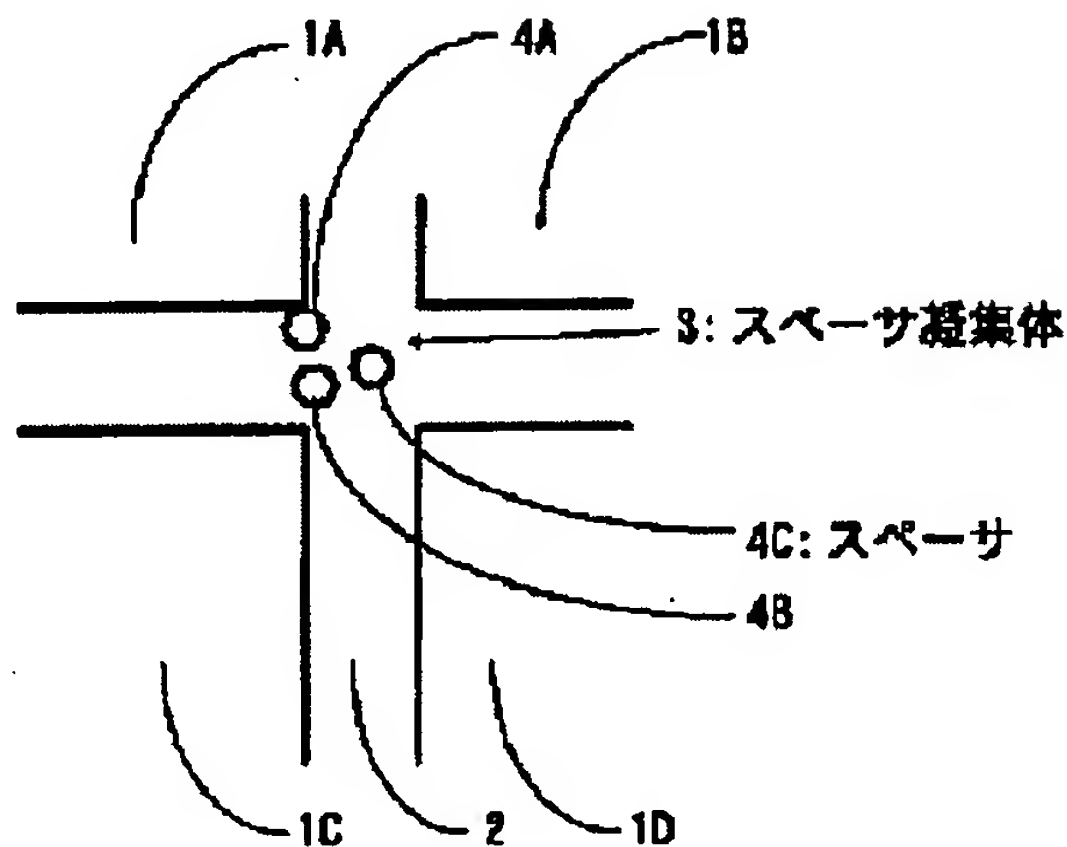
**SPACER DISCHARGING METHOD AND LCD ELEMENT**

**Patent number:** JP11024083  
**Publication date:** 1999-01-29  
**Inventor:** ISHIMARU NAOHIKO; TAMAI KIYOSHI  
**Applicant:** ASAHI GLASS CO LTD  
**Classification:**  
- international: **B05D1/02; G02F1/1335; G02F1/1339; B05D1/02; G02F1/13; (IPC1-7): G02F1/1339; B05D1/02; G02F1/1335**  
- european:  
**Application number:** JP19970181533 19970707  
**Priority number(s):** JP19970181533 19970707

Report a data error here

**Abstract of JP11024083**

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To accurately arrange spacers and to improve display quality and productivity by discharging plural spacers in one discharge and arranging them at nearly constant spaces apart in a state with plural spacers aggregated. **SOLUTION:** In discharging granular spacers for adjusting substrate spaces of LCD elements on a substrate by means of an ink jet device, the plural spacers are designed to be discharged in one discharge and arranged nearly at constant spaces apart in a state where they are aggregated, namely, in an aggregated body 3. As a result, the discharging space of the spacers can be taken widely, enabling most spacers to be arranged in a non-display part other than the pixels used for display. Particularly, with 2-10 pieces of spacers arranged in the form of an aggregated body 3 on a light shielding film 2 on such substrate, almost no spacers are arranged in the pixels used for display and also the light is shielded in the part of the light shielding film 2; therefore, possibility of light leak is eliminated.



Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

**BEST AVAILABLE COPY**

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平11-24083

(43) 公開日 平成11年(1999) 1月29日

(51) Int.Cl.<sup>8</sup>  
G 0 2 F 1/1339  
B 0 5 D 1/02  
G 0 2 F 1/1335

識別記号  
5 0 0  
5 0 0

F I  
G 0 2 F 1/1339  
B 0 5 D 1/02  
G 0 2 F 1/1335

5 0 0

H

5 0 0

審査請求 未請求 請求項の数 5 O L (全 7 頁)

(21) 出願番号 特願平9-181533

(22) 出願日 平成9年(1997) 7月7日

(71) 出願人 000000044

旭硝子株式会社

東京都千代田区丸の内2丁目1番2号

(72) 発明者 石丸 直彦

神奈川県横浜市神奈川区羽沢町1150番地

旭硝子株式会社中央研究所内

(72) 発明者 玉井 喜芳

神奈川県横浜市神奈川区羽沢町1150番地

旭硝子株式会社中央研究所内

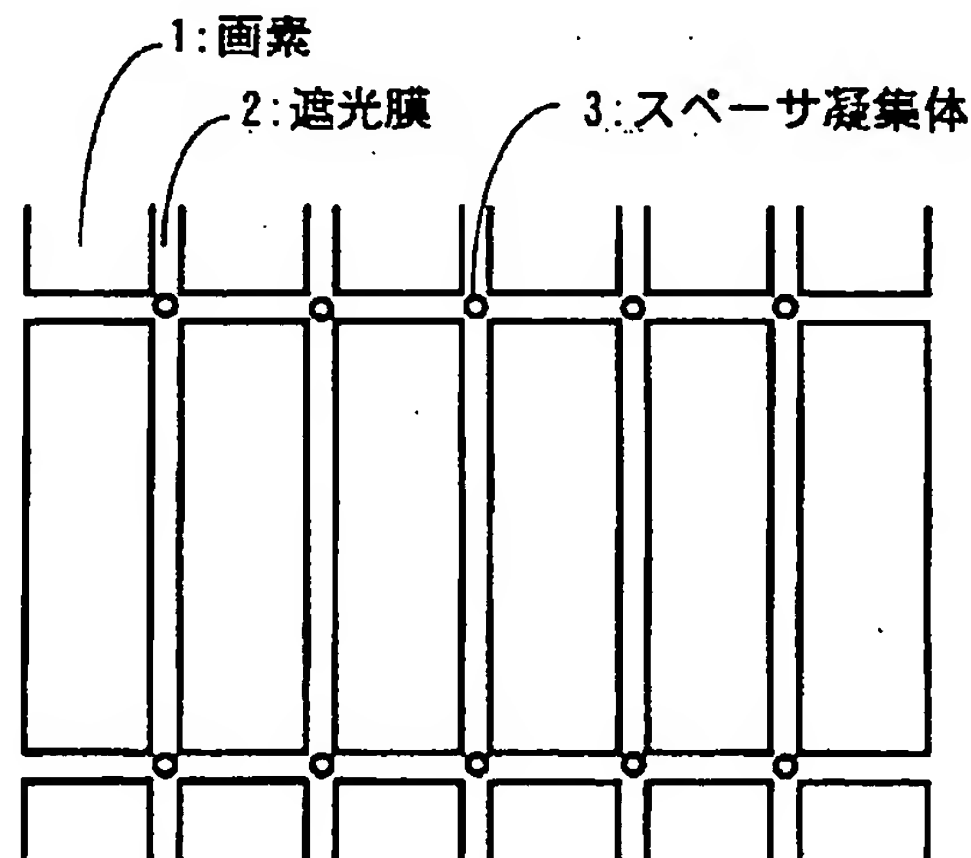
(74) 代理人 弁理士 泉名 謙治 (外1名)

(54) 【発明の名称】 スペーサ吐出方法及び液晶表示素子

(57) 【要約】

【課題】 インクジェット法を用いたスペーサ吐出方法で、画素領域にはスペーサが少なく、表示品位の高い液晶表示素子を生産性が良く製造する。

【解決手段】 インクジェットヘッドからの1回の吐出で複数個のスペーサを吐出し、複数個のスペーサが凝集したスペーサ凝集体3を、画素1を囲むように設けられた遮光膜2がT字状又は十字状に交差する部分に配置する。



BEST AVAILABLE COPY

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 インクジェット装置を用いて基板上に粒状のスペーサを吐出するスペーサ吐出方法において、1回の吐出で複数個のスペーサを吐出し、複数個のスペーサが凝集した状態ではぼ一定間隔に配置されるようにしたことを特徴とするスペーサ吐出方法。

【請求項2】 基板上に画素を囲むように遮光膜が設けられており、その遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサを吐出させる請求項1記載のスペーサ吐出方法。

【請求項3】 インクジェットヘッドを画素の短辺方向に走査してスペーサを吐出させる請求項1又は2記載のスペーサ吐出方法。

【請求項4】 一對の配向処理された基板を対向させてその間に液晶及び粒状のスペーサを挟持した液晶表示素子において、スペーサがインクジェット法で供給され、表示に使用される画素以外の非表示部に2～10個のスペーサが凝集した状態ではぼ一定間隔に配置されていることを特徴とする液晶表示素子。

【請求項5】 少なくとも一方の基板上に画素を囲むように遮光膜が設けられており、その遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサが凝集した状態で配置されている請求項4記載の液晶表示素子。

## 【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、インクジェット装置を用いて基板上にスペーサを吐出するスペーサ吐出方法及びそれを用いて製造した液晶表示素子に関する。

【0002】

【従来の技術】 液晶表示素子等の表示素子は、基板の間隙を一定に保つために、基板間に球状、繊維状等のスペーサを配置している。従来このスペーサは、スペーサ散布装置を用いて基板上にスプレー法等で散布されている。このスペーサは通常5000～30000個/cm<sup>2</sup>程度散布されて用いられている。

【0003】 しかし、このような散布を行うと、スペーサが不均一に分布する傾向がある。特に、表示画素内でスペーサの多数の凝集があると、それが認識され表示品位が低下するというような問題も生じる。また、TFT等の能動素子を設けた基板を用いた場合には、突出したTFT部分にスペーサがあると、基板に力がかかったときに、TFTが破損しやすいというような問題もあった。

【0004】 このため、スペーサを配置する場所を指定して、TFT部分を避けたり、遮光膜部分に配置したりすることが望まれている。これを解決するために、スペーサを印刷により配置する方法や、ディスペンサやインクジェット装置を用いて特定の位置に供給することが提案されている。

【0005】 印刷による方法では、配向処理をした表面

に直接印刷版が触れることになり、配向膜に悪影響を与えることがあった。また、このような印刷インクは高粘度の溶媒を含んでいるので、その溶媒が揮発しにくく、配向状態に悪影響を与えることがあった。

【0006】 一方、インクジェット法による供給は、ほぼ正確な位置に1個ずつ粒状のスペーサを配置していくことができ、多数のノズルを有するインクジェットヘッドを用いれば同時に多数のスペーサを指定位置に配置できるので生産性が良いという利点を有する。

10 【0007】

【発明が解決しようとする課題】 スペーサは、散布の方法によっては散布したスペーサが凝集し、表示に使用される画素内でこの凝集が大きくなると、光が散乱することになり表示上の欠点として認識される。このため、スペーサは均一に配置されていることが好ましいとされている。

【0008】 このため、インクジェット法でのスペーサ供給においても1個ずつ等間隔に配置していくことが考えられる。しかし、スペーサの必要数は目的の液晶表示素子によって決まるので、多数のスペーサを表示を行う画素領域にも配置することになる。

【0009】 このため、表示を行う画素領域にはスペーサが少なく、表示品位の高い液晶表示素子を生産性良く製造することが望まれていた。本発明は、これらの問題を解決し、インクジェット法を用いて正確にスペーサを配置し、表示品位の高い液晶表示素子を生産性良く製造することを目的としたものである。

【0010】

・【課題を解決するための手段】 本発明は、インクジェット装置を用いて基板上に粒状のスペーサを吐出するスペーサ吐出方法において、1回の吐出で複数個のスペーサを吐出し、複数個のスペーサが凝集した状態ではぼ一定間隔に配置されるようにしたことを特徴とするスペーサ吐出方法、及び、基板上に画素を囲むように遮光膜が設けられており、その遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサを吐出させる上記のスペーサ吐出方法、及び、インクジェットヘッドを画素の短辺方向に走査してスペーサを吐出させる上記のスペーサ吐出方法を提供する。

40 【0011】 また、一對の配向処理された基板を対向させてその間に液晶及び粒状のスペーサを挟持した液晶表示素子において、スペーサがインクジェット法で供給され、表示に使用される画素以外の非表示部に2～10個のスペーサが凝集した状態ではぼ一定間隔に配置されていることを特徴とする液晶表示素子、及び、少なくとも一方の基板上に画素を囲むように遮光膜が設けられており、その遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサが凝集した状態で配置されている上記の液晶表示素子を提供する。

50 【0012】

【発明の実施の形態】本発明では、インクジェット装置を用いて、基板上に液晶表示素子の基板間隙を調整する粒状のスペーサを吐出する際に、1回の吐出で複数個のスペーサを吐出し、複数個のスペーサが凝集した状態でほぼ一定間隔に配置されるようにする。これにより、スペーサの吐出間隔を広く取ることができ、表示に使用される画素以外の非表示部にほとんどのスペーサを配置できる。

【0013】特に、その基板上の遮光膜部分に2〜10個のスペーサを凝集した状態で配置することにより、表示に使用される画素内にほとんどスペーサが配置されなく、かつ、遮光膜部分では光が遮断されているので、光漏れの心配もない。

【0014】図1は本発明のスペーサを吐出した基板の平面図であり、図2はその部分拡大図である。図1及び図2において、1、1A、1B、1C、1Dは画素、2は遮光膜、3はスペーサ凝集体、4A、4B、4Cはそのスペーサ凝集体の個々のスペーサを示す。

【0015】図3は本発明に用いるスペーサ吐出装置の代表例の正面図である。図3において、11はインクジェットヘッド、12はインクジェットヘッド11が移動するガイドレール、13は基板、14は基板13を載せるスライドテーブル、15はスライドテーブルを載せる基台を示す。

【0016】この図の装置では、インクジェットヘッド11がガイドレール12を移動する。すなわち、図の左右方向に移動しながらスペーサを吐出する。一方、スライドテーブル14が図の奥行き方向に移動する。これにより、基板の任意の位置にスペーサを吐出できる。吐出位置の位置合わせはこの例に限られず、インクジェットヘッド自体が左右及び奥行きの2方向に移動可能にされていてもよく、スライドテーブル自体が左右及び奥行きの2方向に移動可能にされていてもよい。

【0017】このスペーサ吐出装置は、種々の用途に使用されるが、特に液晶表示素子のスペーサの吐出装置に用いることが好ましい。液晶表示素子では、2枚の基板間隙を一定に保つためにスペーサを基板間に配置している。これはSTN型液晶表示素子であっても、TFT型液晶表示素子であっても使用されている。

【0018】このスペーサは凝集すると液晶表示素子の光抜けや黒点となって認識されるため、できるだけ分散させて配置されることが好ましいとされている。しかし、本発明のようにスペーサを凝集させて、表示に使用される画素以外の非表示部にスペーサの凝集体を配置することにより、画素領域の表示品位を高くし、かつ、生産性を良くすることができる。

【0019】本発明で使用するインクジェットヘッドは、圧電素子により駆動されるものや加熱により溶液を気化させて駆動されるもの等公知の構成のものが使用できる。本発明では通常の着色インクとは異なり、大きな

径のスペーサ、すなわち固形物を吐出するため、圧電素子による駆動するタイプの方が好ましい。

【0020】インクジェットヘッドのノズルは1個でもよく、数十以上ノズルを並べたものでも使用できる。インクジェットヘッドでは個々のノズルからの吐出を制御できるので、通常は多数のノズルを有するインクジェットヘッドを用いて、スペーサを配置していくことが生産性から見て好ましい。

【0021】本発明で使用するスペーサは、インクジェットヘッドのノズルから吐出可能な径のスペーサであれば使用できる。スペーサの径は使用目的より異なるが、液晶表示素子の場合には、通常2〜20 $\mu$ m程度とされる。スペーサの材質としてはプラスチック製が代表的なものであるが、粒状のものであれば、ガラスやセラミック製のものも使用できる。本発明におけるスペーサには、球状のもの、円筒状で直径と高さがほぼ等しいものなどが使用できる。

【0022】本発明では、このスペーサが1回の吐出で2〜10個吐出されるようにされる。これにより、複数のスペーサが凝集状態となる。このスペーサの凝集体は、2〜10個のスペーサが凝集しているが、表示に使用される画素以外の非表示部にその大部分が配置されるので、表示品位を低下させることが少ない。

【0023】この凝集とは、複数のスペーサが隣接スペーサと接触して存在する場合のみを意味するのでなく、その直径以内の範囲内で間隔を置いて存在する場合も意味する。図2の例では、3個のスペーサが近接して存在しているところが示されている。スペーサ4Aと4B及びスペーサ4Bと4Cは、夫々その直径以内の間隔を置いて近接しており、スペーサ4Aと4Cとはその直径を超える間隔を置いて近接している。本発明では、この3個のスペーサは凝集しているとみなす。

【0024】本発明では、スペーサは基本的には表示に使用される画素以外の非表示部に配置される。これは、スペーサをインクジェット法で吐出させていること及び遮光膜の線幅が狭いことから、表示に使用される画素内に一部のスペーサが入り込むのを完全に防止することは難しいためである。スペーサは表示に使用される画素以外の非表示部にのみ配置されるようにできれば最も好ましいが、80%以上のスペーサが非表示部に配置されるようにされれば、表示品位の低下は少ない。

【0025】この表示に使用される画素とは、電極が対向していて電圧の印加状態により意図的に表示を変化させる部分を意味している。通常のドットマトリクスによる表示の場合、画素は長方形でありその周辺を囲むように非表示部が形成されている。また、TFT等の能動素子がある場合には、その部分も通常は非表示部とされる。なお、能動素子部分には加圧による能動素子の破損を防ぐためにスペーサを配置しないこともあるので、その場合にはスペーサが配置されるのは非表示部でかつ能



動素子のない部分ということになる。

【0026】この非表示部分は、表示のコントラスト比を上げるために遮光膜に覆われるようにすることが好ましい。本発明では、スペーサは凝集させて配置されるので、非表示部に遮光膜があれば、凝集による光の漏れが見えないので好ましい。以下の説明では、非表示部に遮光膜があるとして説明する。

【0027】カラーSTNLC DやカラーTFTLC Dでは、図1や図2に示すようにRGB3色の画素が遮光膜に囲まれて多数配置されている。本発明では、この遮光膜2の上にスペーサ凝集体3がくるようにスペーサを吐出する。この画素は通常短辺が50～150 $\mu$ mピッチで形成される。これは表示面積とその中に配置される画素数により決まり、RGB3色の画素の場合には、一般的には長方形の画素が3個集まってほぼ正方形の表示領域を構成する。

【0028】たとえば、12.1インチでSVGA表示の場合には、短辺側のピッチは約102 $\mu$ m、長辺側のピッチは約306 $\mu$ mとなる。この画素1を囲む部分に遮光膜2が形成されている。この遮光膜は電極のパターニング精度や2枚の基板の位置合わせ精度を考慮してパターニングされる。精度を甘くすると、遮光膜の幅が広くなり、画素の開口率が低下して表示が暗くなるので、許される範囲内で遮光膜の幅は狭い方がよい。このため、遮光膜の幅は一般的には10～25 $\mu$ m程度とされる。

【0029】STNLC Dで能動素子を設けない場合、短辺側のピッチを約102 $\mu$ m、長辺側のピッチを約306 $\mu$ mとし、遮光膜の幅を20 $\mu$ mとした場合には、各画素の形状は82×286 $\mu$ mとされ、開口率は約75%となる。本発明では、この遮光膜の設けられた部分にスペーサを吐出する。

【0030】この場合、その遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサを吐出させることが好ましい。この図1及び図2の例では、長方形の画素が上下左右に繰り返して配置されている。すなわち、遮光膜の線が格子状に上下左右に夫々一直線に設けられている。遮光膜が十字状に交差する部分とは、図2で説明すると、画素1A、1B、1C、1Dの4つの端部が集まっている部分となる。すなわち、上下につながる遮光膜と左右につながる遮光膜とが交差する部分である。

【0031】遮光膜がT字状に交差する部分とは、たとえば画素が1/2ピッチずらして配置された場合であって、左右につながる遮光膜に上又は下から延びてきた遮光膜がT字型に交わる部分である。図2で画素1Cと画素1Dとがつながっている場合（画素1Aと画素1Bとの間に遮光膜があるが、画素1Cと画素1Dとの間に遮光膜がない）が相当する。

【0032】このような遮光膜がT字状又は十字状に交差する部分にスペーサを吐出させると、着弾によりスペーサが移動しても、遮光膜の外

の表示に使用される画素内に飛び出す可能性が低くなる。

【0033】もし、液晶表示素子の基板間隙を4 $\mu$ mとした場合、スペーサを1個ずつ吐出すると、短辺側では約102 $\mu$ mピッチ、長辺側では約306 $\mu$ mピッチに配置されるので、1 $\text{cm}^2$  当りのスペーサ数としては3200個程度にしかない。このスペーサ数で十分な基板間隙制御ができれば問題はないが、この程度のスペーサ径の場合、1 $\text{cm}^2$  当り5000個以上スペーサを設けないと、基板間隙制御が充分にできないことが多い。

【0034】この3200個のスペーサを配置した状態が、図1のスペーサ凝集体3の代わりに、同じ位置に1個ずつのスペーサが配置されたものとなる。インクジェット法でスペーサを配置していく場合、図1の左右又は上下方向にインクジェットヘッドを走査してスペーサを吐出して行けばよい。

【0035】このスペーサの数を増やす場合、画素の短辺側のスペーサ間にさらにスペーサを配置することも考えられるが、通常は長辺側の画素のスペーサ間にさらにスペーサを配置することが考えられる。これは、短辺側のスペーサ間の距離は102 $\mu$ mであるのに対し、長辺側のスペーサ間の距離は306 $\mu$ mであり、間に1個のスペーサを配置すればスペーサ間の距離は153 $\mu$ mになり、間に2個のスペーサを配置すればスペーサ間の距離は102 $\mu$ mになり、短辺側と配置のピッチが近くなる。

【0036】しかし、このように配置すると、スペーサが遮光膜が直線状の幅の狭い部分に吐出されること、及び、固形分が少ない液で吐出されるので着弾後移動しやすいことから、画素領域にスペーサが配置される可能性が増大する。また、長辺の間に2個のスペーサを配置するためには、スペーサの配置間隔が上下左右102 $\mu$ mピッチになり、インクジェットヘッドのノズル間の距離を102 $\mu$ mとし、ノズル数を増加させる必要がある。

【0037】本発明では、このようにスペーサを1個ずつ配置して行くのではなく、1箇所に1回の吐出で2～10個のスペーサを配置する。このため、図1のような遮光膜が十字状に交差する部分にのみ、2～10個のスペーサの凝集したスペーサ凝集体を配置すればよい。この場合、1箇所に2個のスペーサを凝集配置すれば、1 $\text{cm}^2$  当りのスペーサ数は約6400個になり、1箇所に3個のスペーサを凝集配置すれば、1 $\text{cm}^2$  当りのスペーサ数は約9600個になる。

【0038】これだけのスペーサを配置しても、各スペーサはほとんど凝集していて、かつ、遮光膜が十字状に交差する部分にのみ存在している。これは、1回の吐出で複数このスペーサを吐出すること、及び、固形分が増えるので着弾後スペーサが移動しにくくなることから、スペーサが凝集して遮光膜部分から画素領域に飛び出し

にくくなるためである。

【0039】さらに、図1のようにスペーサが配置されるので、インクジェットヘッドは図の左右方向に走査するようにすれば、ノズルのピッチは306 $\mu$ mでよく、少ないノズルでスペーサの配置ができ、生産性が良い。このノズル数が少ないことは、吐出不良が生じる可能性が減ることにもなり、歩留りも向上する。

【0040】すなわち、インクジェットヘッドとしてノズルのピッチを306 $\mu$ mとしたインクジェットヘッドを用い、そのインクジェットヘッドを画素の短辺方向に、すなわち、図1の左右方向に走査してスペーサを吐出させることができる。

【0041】なお、この場合インクジェットヘッドとしてノズルのピッチを306 $\mu$ mに固定したインクジェットヘッドを用いてもよく、それよりも長いピッチのものを用いて、インクジェットヘッドを走査方向に対して傾斜して配置して走査するようにしてもよい。

【0042】スペーサを吐出するために用いる吐出液は、インクジェットヘッドから吐出できる吐出液であればよく、通常はスペーサと有機溶媒又は水系溶媒又はそれらの混合溶媒とを混ぜたものが用いられる。スペーサと溶液との比率は、インクジェットヘッドのノズルから吐出可能な範囲で適宜設定されればよい。これはスペーサの径によっても変わるが、通常0.05～5重量%程度とされる。

【0043】なお、このスペーサを混ぜた溶液は、スペーサ、有機溶媒、水の他に、スペーサを基板面に接着するのに用いられる接着剤、分散性を向上する分散剤等を添加していてもよい。

【0044】液晶表示素子の基板としては、電極が設けられただけの基板、その上に配向膜が形成された基板、カラーフィルタや遮光膜が形成された基板、TFT等の能動素子が形成された基板、さらにそれらの部材が複合して形成された基板が使用できる。

【0045】液晶表示素子の場合、ポリイミドに代表される非親水性の有機樹脂系の配向膜を用いることが多い。この場合、スペーサと一緒にされる溶液は、極力表面張力が高い水を多く含むものとするのが好ましい。

【0046】液晶表示素子は2枚の基板を重ね合わせて形成される。このため、通常は一方の基板に本発明のスペーサがインクジェット法で配置される。そして他方の基板と重ね合わせて液晶表示素子を作製する。スペーサを吐出する基板は、位置合わせの点からは、遮光膜が形成された側の基板とすることが好ましい。

【0047】

【実施例】

「例1（実施例、比較例）」スペーサ吐出装置として、図3に示すような装置を使用し、その監視のためにCCDカメラとファイバースコープ光源とを設けた。インクジェットヘッドのノズル間隔は306 $\mu$ mとしたものを

準備した。スペーサは直径4 $\mu$ mのプラスチック製球状スペーサ（積水化学社製商品名「マイクロパール」）を用いた。吐出液は、スペーサ固形分を0.1重量%、0.2重量%、0.3重量%、0.6重量%とし、溶媒組成は水/エチレングリコール/エチレングリコールモノブチルエーテル=90/8/2（重量比）としたものを用いた。

【0048】ITO付きのカラーフィルタ基板の表面にポリイミドの配向膜を形成したガラス基板を準備した。この基板を用いて、インクジェットヘッドを図1の左右方向に走査しながら、スペーサ入りの吐出液を吐出した。

【0049】このカラーフィルタ基板のサイズは、12.1インチSVGAで顔料分散法にて作製されたものを用いた。スペーサの吐出位置は、図1に示すように遮光膜（線幅約15 $\mu$ m）が十字状に交差する部分をねらって行った。この間隙部分は、遮光膜により光が遮断されており、この間隙部分では透明電極のないことにより深さは約0.3 $\mu$ mとなっている。

【0050】インクジェットヘッドからのスペーサの吐出は、スペーサ固形分を0.1～0.6重量%としたことにより、1回の吐出で平均スペーサ個数が1～6個になるようにした。この各基板を用いてカラーSTN型液晶表示素子を作製して、表示の色ムラを観測した。

【0051】この結果、スペーサ固形分を0.1重量%とした場合には、遮光膜が十字状に交差する部分には平均スペーサ個数がほぼ1個となり、スペーサ密度は約3300個/cm<sup>2</sup>となった。同様にスペーサ固形分を0.2重量%、0.3重量%、0.6重量%とした場合には、遮光膜が十字状に交差する部分には平均スペーサ個数が夫々ほぼ2～6個となり、スペーサ密度は夫々増加した。これらの基板を用いてカラーSTN型液晶表示素子を作製したところ、色ムラはほとんど見いだせなかった。

【0052】「例2（実施例、比較例）」例1と同じ基板及び同じインクジェットヘッドを用いて、画素の短辺側のスペーサを吐出する間隔（短辺間隔）を51 $\mu$ m、76.5 $\mu$ m、102 $\mu$ m、153 $\mu$ m、204 $\mu$ m、306 $\mu$ mと変えて、遮光膜の範囲に納まったスペーサの割合を測定した。比較のために、吐出液のスペーサ固形分を0.1重量%（1吐出平均スペーサほぼ1個）と0.6重量%（1吐出平均スペーサほぼ6個）の両方について行った。

【0053】その結果を表1に示す。この表1からも明らかなように、遮光膜が十字状に交差する場所にスペーサを吐出した場合（短辺間隔=102 $\mu$ m、204 $\mu$ m、306 $\mu$ m）では、ほぼ90%程度は遮光膜部分にスペーサが存在していることが判明した。短辺間隔が狭い場合には、複数のスペーサを1回の吐出で吐出する方が、明らかに遮光膜部分にスペーサが存在することが多

いことが確認できた。

【0054】色ムラが少なくなるために必要なスペース数(5000個/cm<sup>2</sup>)を超えるスペース数を得るためには、吐出液のスペース固形分0.1重量%の場合には、表1の短辺間隔で51μm以下が必要となる。一方、0.6重量%の場合には、短辺間隔306μm以下で満足する。

【0055】「例3(実施例、比較例)」例1と同じ基板を用い、インクジェットヘッドはノズル間隔を102μmとしたものを用いて、図1の上下方向にインクジェットヘッドを走査するようにした。画素の長辺側のスペースを吐出する間隔(長辺間隔)を102μm、153μm、204μm、306μmと変えて、遮光膜の範囲に納まったスペースの割合を測定した。比較のために、吐出液のスペース固形分を0.1重量%(1吐出平均スペースほぼ1個)と0.6重量%(1吐出平均スペースほぼ6個)の両方について行った。

【0056】その結果を表2に示す。この表2からも明らかのように、遮光膜が十字状に交差する場所にスペースを吐出した場合(長辺間隔=306μm)以外では、80%を下回るスペースのみが遮光膜部分に存在していることが判明した。

【0057】色ムラが少なくなるために必要なスペース数(5000個/cm<sup>2</sup>)を超えるスペース数を得るためには、吐出液のスペース固形分0.1重量%の場合には、表2の長辺間隔で102μm以下が必要となる。一方、0.6重量%の場合には、長辺間隔306μm以下で満足する。

【0058】また、インクジェットヘッドのノズル数を、例1、例2の場合と同じ個数としたので、例2の同じ基板に対する描画速度が1/3になり、生産性が低いものであった。

【0059】

【表1】

短辺間隔	0.1%での割合	0.6%での割合
51	41%	52%
76.5	52%	59%
102	89%	91%
153	71%	75%
204	92%	88%
306	91%	89%

【0060】

【表2】

長辺間隔	0.1%での割合	0.6%での割合
102	69%	64%
153	55%	52%
204	78%	74%
306	91%	93%

【0061】

【発明の効果】本発明のスペース吐出方法によれば、インクジェット装置での1回の吐出で複数個のスペースを吐出し、複数個のスペースが凝集した状態ではほぼ一定間隔に配置されるようにしている。これにより、スペースの吐出間隔を広く取ることができ、表示に使用される画素以外の非表示部にほとんどのスペースを配置できる。これにより、スペースによる画素領域のコントラスト比の低下を抑制できる。

【0062】また、その基板上の遮光膜部分に2~10個のスペースを凝集した状態で配置することにより、表示に使用される画素内にほとんどスペースが配置されず、かつ、遮光膜部分では光が遮断されているので、光漏れの心配もない。特に、遮光膜が十字状やT字状になっている部分にスペースを吐出することにより、画素領域にスペースが流出する割合が低くなり、スペースによる画素領域のコントラスト比の低下を大きく抑制できる。

【0063】また、1回の吐出で複数個のスペースを吐出するので、インクジェットヘッドのノズル間隔を広く取れ、1枚の基板に対する描画速度が向上し、生産性が高い。本発明は、本発明の効果を損しない範囲内で、種々の応用が可能である。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明におけるスペースを吐出した基板の平面図。

【図2】図1の部分拡大図。

【図3】本発明に用いるスペース吐出装置の代表例の正面図。

【符号の説明】

1：画素

2：遮光膜

3：スペース凝集体

4：スペース

11：インクジェットヘッド

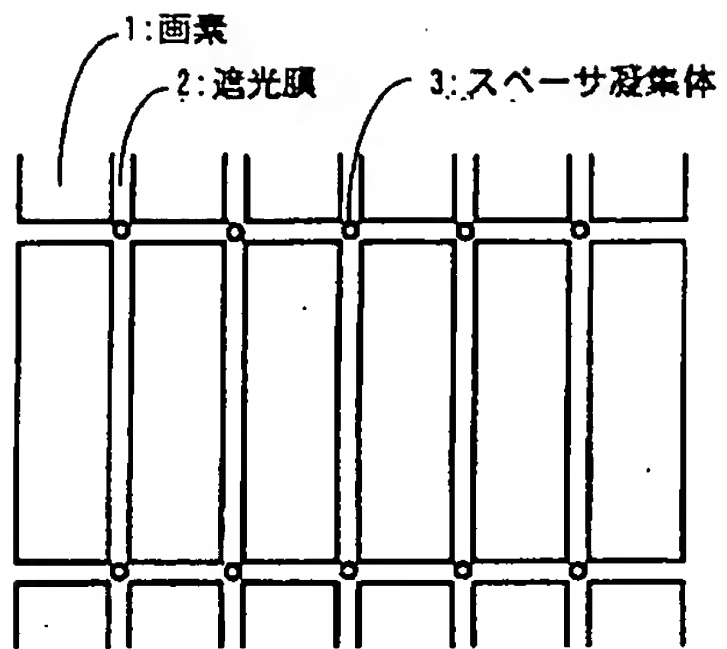
12：ガイドレール

13：基板

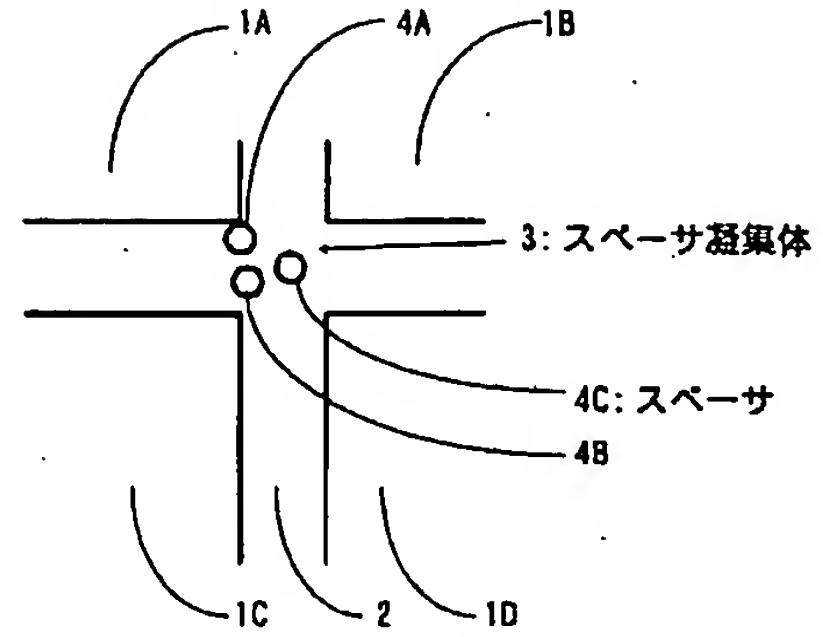
14：スライドテーブル

15：基台

【図1】



【図2】



【図3】

